



## 山守 良佳 Yamamori Yoshika 《こころ》

1986 三重県津市出身 / 2015 第50回日春展 入選('17 '18 '19 '21) / 2016 改組新第3回日展 入選('17 '18 '19 '20) / 2018 名古屋芸術大学大学院美術研究科絵画領域日本画修了 / 現在 名古屋芸術大学講師

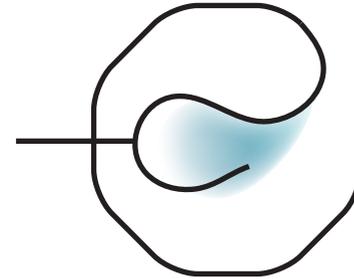
「細かな絹目の上に絵具を置いた時にふわっと広がる世界は、自分の描き手としての心の在り様が素直に映し出します。少しドキドキしながら取り掛かる絹本の制作にはまだ未知なる世界が広がっているように思います。」



## 李姝霖 Li Shulin 《金珠》

2017 School of Visual Arts大学卒業 / 2018 中国国家画院で研修 / 2019~ 日本画創作 / 現在 名古屋芸術大学大学院日本画制作1年在籍

「今回の機会ですべて絹絵を描きました。墨の隈取と絵の具の重ねは、普段使っている紙、麻紙や和紙と違う描き心地です。絹絵の裏彩色技法も初めて試した、とっても新鮮な体験です。」



## かかみがはら えぎぬproject

ことほ  
新庁舎展示企画 - 寿ぐー

2021.09.21-12.23

えぎぬ(絵絹)とは、主に日本画を描く素地として使用する目的で生産された絹織物のことをいいます。色の発色や定着を良くするために、細かく均一に織り上げてあります。今年度より、アートに関わる若い世代に「えぎぬ」の存在や素材の素晴らしさを知ってもらい、新たな価値を創出する取り組みとして、「かかみがはら えぎぬProject」を立ち上げました。

### かかみがはら えぎぬProject 企画展-寿ぐー-に寄せて お話:長谷川喜久 / インタビュー:廣江貴子

「ART×産業」をテーマにしたアートブリッジ事業を進めるにあたり、昨年度は、キックオフイベントとして、えぎぬ(絵絹)を使った日本画のワークショップ「マイファーストえぎぬ作品を作ろう!」を開催しました。今年度は、えぎぬの魅力を伝える展覧会を新庁舎の開庁に合わせて開催します。今回のプロジェクトに携わっていただいた名古屋芸術大学日本画コースの長谷川喜久教授にお話を伺いました。

—名古屋芸術大学日本画コースでは、えぎぬを使った制作は行っていますか?

通常和紙を使用することが多いのですが、日本画にとってえぎぬは関わりの深い素材なので、学生の体験値を高めるため取り扱い方や表装の仕組み、といった講義、制作を1、2年対象に設けています。

—学生さんの取り組みはどうでしたか?

今回は、大学院生4名が取り組みました。絹絵に興味があるけれど、何となくそちらに振り切れなかった皆の背中を押す良い機会となりました。各自が描き続けてきたテーマを、絹に対して効果の高い技法を加え、素材と表現が相性良く合う形で昇華させていたように思います。若い人には早くからスタイルを限定せず、もっとどん欲にいろんな体験をして欲しいと考えています。今回の絹絵体験が、今後の制作スタイルに良い影響を与えそうな気がしてとても楽しみです。



—取り組みから見てくる、えぎぬの可能性はどうでしたか? 学生と一緒に今回の取り組みを行っていく中で、絹絵制

作における従来の古典描法や技法を、皆は新鮮なものとして捉えていることに気づきました。古典は必ずしも古いものではなく、むしろ新しいものとして制作に取り入れている、そこがとても面白いですね。もちろん、湯引きやドーサ等、基本的に必要なプロセスは踏まえてもらっていますが、我々とは絹への印象、鮮度の違う世代が見せるスタイルにもまた時代を超えた魅力があります。

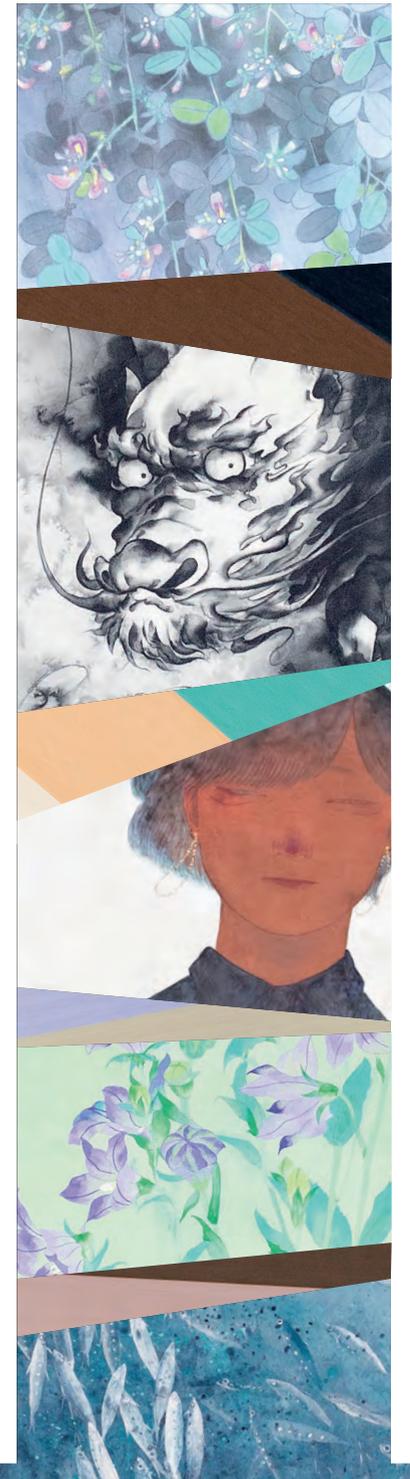
—プロジェクトから見えてきたことはありますか?

この企画はまず、同寸軸装という条件の中で何ができるか?ということから始まりました。取り組んでいく中で、失敗が許されにくい素材である反面、暈し表現には最適なえぎぬに対して、次回作の課題や手応えも見えたのではないかと思います。先日、大学院生のアトリエに行った際、木枠に絹を貼った制作途中の作品を見つけ、えぎぬに共感し、新たに描いているその姿勢を嬉しく思いました。

—次回作に向けて取り組んでいきたいことはありますか?

今回は、軸装という形態の中、従来からの技法、表現方法を踏襲しながら、時代に合わせた作品を展示することができたと思います。今回は、描きたいものに対してサイズや形態を決めるというような展開や、モチーフを制限し、表現の面を重視して、えぎぬという素材とどのように向き合うかということにもトライしてみたいです。

—来庁される方に皆さんの作品を鑑賞していただきながら、プロジェクトの今後の展開を模索していきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。





阿部 任宏 Abe Tadahiro <sup>はくろ</sup> 《白露》

1980 愛知県立芸術大学大学院修了 / 1982~87 愛知県立芸術大学日本画研究室助手 法隆寺金堂壁画模写従事 / 2010~ 名古屋芸術大学非常勤講師 / 1979 春の院展、院展初入選以後出品・グループ展・個展多数 / 現在 日本美術院 特待

「日本画の薄塗り表現において墨の線描や暈しが美しい。軸装や卷子ではコンパクトに収納できる。」



安藤 祐実 Ando Yumi <sup>かな</sup> 《悲しみ、そのあとは》

1998 愛知県生まれ / 2017 名古屋芸術大学日本画コース入学 / 2021 名古屋芸術大学日本画コース卒業 / 2021 第5回春日展 入選 / 現在 名古屋芸術大学大学院日本画制作1年在籍

「絹絵は表装をするため厚塗りをしすぎではならず、普段私は高知麻紙に厚塗りで描くことが多いので、表現に悩み、学部1年生の時以来の絹絵ということもあり、描くのに苦戦しました。」



磯部 絢子 Isobe Junko <sup>ドロップス</sup> 《drops》

1989 愛知県出身 / 2011 名古屋芸術大学美術学部日本画コース卒業 / 2013 名古屋芸術大学大学院美術研究科美術専攻日本画制作研究領域修了 / 2013~2015 名古屋芸術大学美術学部日本画コース助手 / 現在 愛知県を拠点に活動中

「私の絵はグラファイトを使っており、画面をこすって鉛のような光沢を出すのですが、絹が持つ画面の強さで紙に描く以上に綺麗な色を出すことができました。」



大見 真里佳 Omi Marika <sup>のどか</sup> 《長閑》

1995 愛知県名古屋市出身 / 2019 名古屋芸術大学美術学部日本画コース卒業、名古屋芸術大学大学院美術研究科日本画制作入学 / 2021 名古屋芸術大学大学院美術研究科日本画制作卒業 / 現在 名古屋芸術大学助手

「和紙とはまた違う、絹独特の柔らかい風合いが好きです。絹に色を置いたとき、静かにスー……と吸い込まれていく様子が愛おしく感じます。」



瀬永 能雅 Senaga Takamasa <sup>おおかみ</sup> 《狼》

1965 三重県に生まれる / 1992 愛知県立芸術大学大学院修了 / 1997~2015 名古屋城本丸御殿障壁画復元模写 / 現在 名古屋芸術大学教授

「絹絵は最初絹を木枠に張り、絵を仕上げた後から軸に仕立ててもらいますので、肌裏紙を当てるとどの様に見えるかワクワクします。湿度によって張力が変わり、それに応じて描き味も日々変わりますので、毎日新鮮な気持ちで取り組みました。また抵抗感のある紙に比べて半透明な絹は画面の奥に入っていきような空間意識で制作しています。」



陳子薇 Chen Ziwei <sup>おど</sup> 《クラゲの踊り》

2015 華中師範大学入学 / 2019 華中師範大学卒業、来日、東洋言語学院入学 / 2020 日本画作品を創作始める / 2021 東洋言語学院卒業、名古屋芸術大学大学院絵画研究科入学 / 現在 名古屋芸術大学大学院日本画制作1年在籍

「初めての絹絵作品です。水の中にゆらゆらのクラゲを描きました。ふわふわの感じは絹本と似合うと思います。麻紙に描くのと違い、絹は透けて染まりやすく、始まる時はすごく緊張します。今回はたくさん経験をさせていただきました。」



丹羽 優香 Niwa Yuuka <sup>こう</sup> 《洗》

2018 第2回春日展 初入選 / 2018 第1回安曇野涼風扇子公募展 涼風賞 / 2020 名古屋芸術大学大学院美術研究科修了 / 2021 丹羽優香 個展(ギャラリーくさ笛) / 現在 愛知県を拠点に活動中

「普段は紙本で制作しているので試し描きをしながら進めました。裏彩色で絵の具を乗せるのがとても楽しかったです。実は絹本は少しだけ苦手意識を持っていたのですが、久しぶりに描いてみたら紙本とはまた違った奥行きがでることや描き心地など、以前は気づけなかった魅力がたくさんありました。この機会にまた絹本の作品も製作していきたいと思います。」



長谷川 喜久 Hasegawa Yoshihisa <sup>しょうりゅうず</sup> 《昇龍図》

1992 川端龍子賞 大賞 / 1999 日展特選(同01/05会員賞、18東京都事賞) / 2011 上海美術館主催 長谷川喜久展 / 2019 瑞龍寺 塔頭天澤院 双龍図襖制作 / 現在 日展特別会員 名古屋芸術大学教授

「ゆっくりと摺った墨を絹の上で暈した時、ほんの少し手元を感じる、特有の繊維感がとても好きです。その微妙な感覚を大切に更には水を垂らしたり絵具を乗せたりする行為の中には、まるで空気を画面上再構築している様な喜びが存在します。」



林 真 Hayashi Shin <sup>ききょう</sup> 《桔梗》

1999 名古屋芸術大学大学院修了 / 2005 臥龍桜日本画大賞展 大賞('04優秀賞) / 2013 日展 特選 / 2021 春日展 新会員賞('04'11'17奨励賞、'18春日賞) / 現在 日展会友、春日春会会員

「木枠に絵絹を糊で貼り付け湯引きをする作業から始めました。実際に筆で描くまで戸惑うことが多かったのですが、紡いだ糸から生まれる繊細な肌合いは、滑らかな光沢と風合いを持ち合わせていて、描く前から気持ちが高まりました。紙本とは筆の載りも異なり、ガラス絵のように裏側から描くこともでき絹ならではの色彩空間を楽しむことができました。」



福本 百恵 Fukumoto Momoe <sup>きょうそく</sup> 《休息に(キビタイボウシンコ)》

2005 第37回日展 初入選 / 2006 第41回春日展 初入選('18春日展 奨励賞、'19春日賞) / 2008 名古屋芸術大学大学院日本画研究科修了 / 2018 第8回前田青邨記念大賞展 優秀賞 / 現在 日展会友、春日春会友、名古屋芸術大学非常勤講師

「暈しはもちろん細く長い線、グラデーションも滑らかに自由自在に描くことができました。」



帆刈 晴日 Hokari Haruhi <sup>リング</sup> 《ring》

2011 第46回春日展 入選(同'15) / 2012 名古屋芸術大学美術学部美術学科日本画コース卒業 / 2018 改組 新 第5回日展 入選 / 2021 特別展 日本画の可能性 若手作家からの提言(愛知:古川美術館) / 現在 愛知県を中心に個展、グループ展に参加

「絹本制作は大学在学中の課題で制作した以来で、本格的に自身の作品として描くのはほぼ初めてでした。普段の制作スタイルとして、荒い番手の岩絵具を何層も重ねた作品が多いので、今回の絹本制作は自分の中では珍しい作品となりました。最初は不安もあったのですが、墨や絵具・箔の素直な色の綺麗さや、柔らかく表現される裏彩色の楽しさなど、絹本制作の面白さに改めて気付くことができました。」



三柳 有輝 Mitsuyanagi Yuuki <sup>よる こえ</sup> 《夜の聲》

1998 石川県生まれ / 2016 名古屋芸術大学日本画コース入学 / 2020 名古屋芸術大学日本画コース卒業 / 2020 名古屋芸術大学大学院日本画制作研究入学 / 現在 名古屋芸術大学大学院日本画制作2年在籍

「絵を描いていてこちらが気持ちの良くなるような描き心地でした。透明感と上品な光沢は絹ならではの美しさだと思います。」